

【翻 訳】

『オハラ・レデイ司教の日本視察報告書 1946年7月』本文試訳

濱 田 洋 子

A Partial Translation of the“ Report of the Visit of Bishop O'Hara of Buffalo and Bishop Ready of Columbus to Japan-July, 1946 ”

Yoko HAMADA

・ 初めに

本稿は、“ Report of the visit of Bishop O'Hara of Buffalo and Bishop Ready of Columbus to Japan-July, 1946 ”の本文( 26ページ )の試訳である。本報告書は、筆者が2014年9月3日、The Catholic University of America, American Catholic History Research Center( Washington, DC )で入手し、不明瞭な部分の原稿を起こし、翻訳を試みたものである。しかし、報告書は、別紙Eが欠けていると思われ、またカーボンコピーとで、一部非常に不明瞭な部分があり、前後関係から判断した語彙で、翻訳を試みたことをお断りしておく。全体は、約101ページからなり、本文、日本カトリック復興委員会の概要、日本の大司教区、司教区、知牧・代牧区など15の戦禍の概要、日本で宣教している男女修道会の概要( 人数を含む )、教会の統計、修道会の戦争被害のリスト、支援物資が詳細に書き込まれている。さらに別紙A～F( Eを除く。 )が加えられている。

オハラ、レデイ両司教の日本カトリック教会視察に関する経緯と人選、その目的については、拙著、「オハラ司教の遺産 学園創立80周年に寄せて 」『純心人文研究』第22号に詳細を記しているの、併せて参照することを勧めたい。

This is a partial translation of Report Body from “Report of the Visit of Bishop O'Hara of Buffalo and Bishop Ready of Columbus to Japan-July, 1946”. I obtained ‘the report’ at the Catholic University of America, American Catholic History Research Center (Washington, DC) on September 3, 2014. Since some words of the Report Body were not readable due to the carbon copy, some words were still remained unclear. In some sentences, I make bold to tell readers that the translation was made from context.

The report includes the whole aspects of the war damage of Japanese churches, the statistics, and relief supplies. I greatly recommend referring to, “The legacy of Bishop John F. O'Hara.”, Junshin Journal 22 (2015) to know the purpose of the visit to Japan, the process of the choice of the personnel in detail.

## Ⅱ．翻訳本文

Report of the Visit of Bishop O'Hara  
of Buffalo and Bishop Ready of Columbus  
to Japan-July 1946. (1)

オハラ司教（バッファロー教区） レディ司教（コロンバス教区）による日本視察報告書  
1946年7月

The Most Reverend Amleto G. Cicognani, D. D.,  
Apostolic Delegate to the United States,  
Washington, D. C.,  
Amleto G. Cicognani 大司教  
駐米教皇使節  
ワシントン DC

Your Excellency,

Cicognani 大司教閣下（2）の御命令に従い（以下のとおり）報告書（3）を提出いたしますことを光栄に存じます。7月1日月曜日午後6時45分、サンフランシスコを航空機で出発し、7月4日木曜日午後4時29分、東京に到着いたしました。（サンフランシスコ時間7月3日午後11時20分）実際の飛行時間は39時間半、経過時間は52時間44分でした。

日本には19日間滞在しました。その後7月23日夕刻の飛行機でマニラに向かい、翌朝夜明けに当地に到着しました。マニラに3日間滞在し、7月25日の夕刻当地を発って、7月28日朝5時にサンフランシスコに帰着しました。

日本滞在中は、東京を本拠とし、連合軍最高司令官マッカーサー元帥の厚意により、横浜、横須賀、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡、長崎、そして仙台を視察しました。連合軍第八軍エイシェルバーガー司令官は、この任務のために汽車の代わりに、日本の南部、西部、そして仙台にいくために、自由に使える2台の車両を提供してくれました。さらに、九州地区（福岡、長崎）の視察から東京への帰途は、自家用飛行機を派遣してくださいました。（日本視察の全行程は別紙Aに記載されている通りです。）（4）

- 2 -

駐日教皇使節マレラ大司教閣下、東京大司教区ペトロ土井大司教は、私達の視察の手配を、日本カトリック復興委員会（5）の手に委ねてくださいました。その委員会のメンバーは以下の通りです。委員長ブルーノ・ピッター師（S. J. イエズス会） 前京都教区長パトリック・バーン師（M. M. メリノール宣教会） ジョン・ヒギンズ閣下（マサチューセッツ最高裁判所裁判官、戦

争犯罪裁判所メンバー）、エドワード・ランバート師（連合軍総司令部チャプレン、司令官）、ジョン・リーバート氏（総司令部財政部、司令官）、O. C. モーランド氏（the Inter Allied Commission 英国代表）と Van Overmees 師（S. J. イエズス会、東京のカトリック大学）（6）。

日本カトリック復興委員会の綿密な計画と実務的な手配の結果、私達は日本の日本人及び外国人の全司教、ほとんどの教区長、教区管理者、日本で宣教している修道会の総長と協議を重ねることができました。天皇陛下に拝謁を賜り、また、内閣の4名の大臣、多くの外交団と日本政府の他の部門のメンバー、皇族とそのご一家、国会議員、貴族、産業界及び経済界の代表、学者、芸術家、詩人等と会って話をすることができました。私達はまた、病院や避難所、カトリック慈善施設だけではなく、教会での会合でも困窮している人々と交流する機会がありました。最も慰められ、教えられたことは、カトリックの活動に家を提供しようと建物の再建に取り組んでいる労働者との面談でした。彼らの多くは無報酬で余暇の時間に働いていました。

- 3 -

私達は、マッカーサー元帥をはじめ、連合軍第八軍エイシェンバーガー司令官、その他高位の将校達との夕食に招かれました。私達はまた日本における米国海軍の活動を担当しているグリフィン海軍中将（副官）、横須賀海軍基地司令官デッカー大尉と協議をしました。私達は、連合軍と戦争犯罪裁判所の主だった民間人とも面談をしました。

コロバン会パトリック・オコーナー師は、NC プレスの代表として日本に駐在し、日本と海外のプレス代表者との会合を手配してくれました。このような日本人ジャーナリストとの間に築きあげられた良好な関係の結果、私達の滞在期間中日本の新聞各社は、異例の紙面を割いてカトリック教会のニュースを取り上げてくれました。

私達のほとんどの時間は、カトリック教会とその諸施設、あるいはその焼け跡等の視察に充てられました。そこで日本の教会の諸施設の50%以上が戦争中に破壊されたとの報告を受けました。（被害の詳細なリストは、日本復興委員会の個別の報告書に添付されていますが、本報告書の一部となっています。別紙B参照）（7）戦争によってもたらされた惨状は衝撃的ですが、私達は戦争の荒廃のなかで、カトリックの諸活動が活発に行われているのを見ることになりました。学校の授業は焼け出された学校や仮の一時的な校舎で行われています。かつて美しかったと思われるカトリック学校の地下室で、スペイン・メルセス会の修道女達が、350人の生徒を収容するために、1日交替で授業時間を計画しながら教えているのに出会いました。他の学校においては、窓ガラスのない教室、粗末なコンクリートの床に数百人の熱心な生徒達を受け入れていました。

- 4 -

幾人かの生徒達は、カトリック学校に通うために毎日2時間もかけて通学しているとの報告を受けました。混雑は不可避ですが、教師も生徒達も不平も言わずその状態を受け入れています。どの学校にも暖房装置がありません。それは、日本政府が戦争中にすべての暖房機器を金属の再処理のために没収したためであることを知りました。

私達の視察のために計画された公式行事の中で、特記すべき行事は、7月6日日曜日の東京日

比谷公園にある日比谷公会堂での歓迎荘厳ミサでした。主司式者は土井東京大司教で、ミサの奉仕者は日本人でした。壇上の共同司式者は駐日教皇使節シャンボン大司教、ロス司教、浦和教区長モンセニョール内野師、他東京滞在中の司教達でした。全列席者はおよそ4500人、そのうち半数以上は、非カトリック教徒です。その参列者の中には、2人の閣僚、文部大臣田中耕太郎博士、Robert Haneghen, US Postmaster General, William Webb 卿（オーストラリア）と Higgins 裁判官（マサチューセッツ州）の2人の主席裁判官がいました。また多くの米軍の将校と兵士達、著名な日本人、カトリック教徒のみならず非カトリック教徒も、そして多くの東京のカトリック学校の学生達も含まれていました。聖体拝領では、主の聖なる晩餐に著名なアメリカ人も日本人も、皆同じく、貧しきもののの中の最も貧しき者とともに一緒に並んで跪いているのを見ることは感動的なことでした。

ミサに続いて、教皇聖下から日本の司教団と聖職者への書簡が、日本語と英語で朗読されました。その書簡は、日本のカトリック者に慰めと希望をもたらしました。日本のカトリック者は、日本におけるカトリックの発展と再建に、精神的（道徳的）支援、物的支援のいずれにも援助の手を差し伸べるという教皇聖下のお約束に勇気づけられました。

- 5 -

土井大司教は、その美しい歓迎の辞の中で、過去の迫害と戦火で荒廃した日本の教会の打ちひしがれた現在の状態と、その日本の教会が3年以内に、聖フランシスコ・ザビエル来日400年（8）の記念を祝うことになるであろうことを思い起こさせました。しかし、大司教は、「いまこそ我が国の歴史上はじめて、完全な信仰の自由が私たちに与えられたといえるであろう。」と付け加えられました。「このことが日本におけるカトリック教会の第二の春を予知するものとなるように。そして、私達が神の働きの中で不成功に終わることのないように。」と。

文部大臣田中博士は日本の信徒を代表して歓迎の辞を述べました。その際立った社会的地位の高さのために、その率直な発言は深い重要な意味を持っています。ここに詳細を引用することになります。

「武力による戦争が終わって数カ月になります。しかし真の平和への闘いはまだ続いている状態にあります。オハラ司教、レディ司教の両司教閣下はキリストの平和、つまり真の平和の使者として私共のところに来られました。両司教閣下はアメリカの最大の宗教集団、三千万のカトリックの代表であります。そして閣下はアメリカのカトリック信徒の温かい励ましの言葉を持ってこられましたので、私達が一つの偉大な霊的家族である信仰の連帯のことを考えると私共は大いに心強く思います。

両司教閣下は、我が国の歴史の最も暗い時に訪問されています。物理的な困窮よりも霊的な苦しみのほうがより大きい。身体的な飢餓よりも魂の餓えがより苦しい。過去10年間の非難すべき軍国主義の話は、我が国の間違った教育の歴史のほんの1章に過ぎません。あまりにも長い時間、私達は物質の強さと繁栄のみを探し求めてきました。私達は、キリストの教えの恵みを知らなかったし、あるいは否定してきました。私達は神不在の家を建ててきたのでありました。そし

て、今この国は放心し、途方に暮れて立ち尽くしております。

- 6 -

わが国民は、平和を愛する民主主義の上に築いている最も基本的な理念を知りません。自由は手段と混同され、今や、極端な軍国主義的全体主義から、振り子が、統制がとれていない無法の極端な唯物主義と政治的混乱（無政府状態）に揺れております。カトリックの信仰のみが、この国を右翼と左翼の敵対する陣営に分裂させる恐れのある対立を解決することを希望することができます。私達のカトリック教会のみが理性と信仰、自由と法、進歩と伝統、人と社会を和解させることができるのであります。

“ If the hour is dark, it is the darkness before the dawn. (つらいことの後には必ず良いことがあるものである。) 社会のすべての階級において、真剣に考える人々はいま、必死に真の生き様を探し求めております。もう1つの心強く感じさせる出来事が起こってきています。即ち、わが国民は連合軍を通して生きているキリスト教に触れ合うようになってきました。賢明な政治的手腕を持つマッカーサー元帥から非常に多くの一般の兵士の公正さと親切に至るまで、占領の話は正義と人道主義の勝利であります。それゆえにわが国民の多くは、今初めて、キリスト教がアメリカ国民の中で生き生きとした力（強さ）になっていることを感じ始めております。

数百万のアメリカのカトリック教徒の中に、私達はキリスト教の生き生きとした力（強み）を見出しています。両国のカトリックの間に、アメリカ人宣教師がほとんどいなかった過去に存在していたよりもより強い絆を結びましょう。」

民主主義の本質に関する日本での現在の議論を認識しながら、オハラ司教はその返礼の言葉の中で次のように言及しました。「私達は、すべての社会秩序の根底になければならない偉大なるキリスト教の原理に基づいている政府の下で、生きることの恩恵を知っています。 - すなわちそれは神聖なる創造主が最も身分の低い人間に与えられた尊厳であります。

- 7 -

アメリカでカトリック教徒は、組織し、持続することを支援してきた政府のもとで、繁栄し拡大してきました。彼らの仲間である（日本の）カトリック教徒の皆さん、アメリカのカトリック教徒は、皆さんのために祈り、日本の再建にできる限り唯一の正当な根拠に基づいて、協力することを約束しています。 - あらゆる権威の最高の源と全ての人間の神から与えられた権利の認識としての神の承認という根拠に基づいて。 - 」

もう1つの異例の重要な出来事が7月10日にありました。レディ司教が名古屋を訪問している間に、オハラ司教は日本の古都京都、仏教主導の中心地を訪問しました。そこで、西本願寺派、天皇陛下の義弟の大谷僧正は、古色蒼然とした本願寺において、主要な僧侶達や近隣の僧侶達とともに会うために訪問中のアメリカの司教を招待しました。

宗教の儀式が行われるのではなく、仏教の代表者達は教皇がどのようなメッセージを彼らに向けているのかを知りたいと望んでいること、また現代社会で悪と戦っているカトリック教会とど

のように協力することができるのかを知りたいと望んでいることは明らかでした。

招待を受けることにしました。出席した関係者は、オハラ司教、京都教区長古谷司教、京都帝国大学スコラ哲学教授 Vincent Pouliot 師、OP（ドミニコ会）、前京都教区長パトリック・バーン Patrick Byrne 師 M.M（メリノール会）、Harold J. Felaecker 師、M.M（メリノール会）、Patrick O'Connor 師、S.S.C（コロンバン会）、米軍チャブレン Joseph G. Gefell 師です。

大谷僧正の歓迎の辞に応えて、オハラ司教は出席の25人の僧侶達の前で話をし、正義による平和のために、教皇の努力を支持するよう要請しました。オハラ司教は続けて話をしました。

- 8 -

「私はカトリック者としてここに来ました。私は、階級や宗教の区別なく、皆さんとすべての日本人に、教皇ピオ12世聖下からの平和のメッセージを携えてここに派遣されました。（9）キリストのまさにこのことばの中に、教皇が公式に伝えたいメッセージがあります。『私はあなたたちに平安を残す。しかし、この世が与えるようには与えない。心を騒がせることはない。恐れることもない。（ヨハネ14 - 27）』」

教皇聖下は、すべての善意の人々に、宗教的背景を問わず、唯物主義の侵略に対して、霊的価値観を重視し、すべての人に正義と慈善を実践し、不道德と戦うために、ともに共同戦線を組織して、協力し合うことを懇願しておられます。私達は、特に宗教のリーダーである皆さんに、アメリカと同様、社会の基本的な単位としての家族の権利を尊重することの重要性を強調することを要請します。反人間的で不道德主義が、人間に離婚と産児制限を強いる目的で、現在世界中に広がっています。これらの2つの価値体系は、絶対的に人間性と神の法に反するものです。離婚と産児制限はそのようなことを導入する多くの国々に荒廃をもたらします。

約3千万人の仏教徒の指導者で、出席していた25人のうち、5～6人が言葉を返しました。彼らは、精神的（霊的な）指導者として、唯物論的運命を探し求める日本人の傾向を調べることに怠ってきた事を認めることで一般的な見解の一致を見ました。ある一人の僧侶は次のように話しました。「私達の宗教は今の時勢に十分にできていないということを認識しています。私達は、神々に物質的なもののために祈り、そして挫折してきました。私達は、人々に精神的（霊的）なことを重視するように、正義と慈善のために、教皇と共に喜んで働くことをお伝えしたい。」もう一人の僧は、社会の基本的な構成単位としての家族に重点を置くという提言に感謝を表明しました。

- 9 -

古谷司教は、僧侶達の寛容な招待に感謝を述べ、教皇の平和の計画のさらなる解明を提案しました。

公式の集会に続いて、非公式の話し合いが行われました。そして、仏教の指導者達は、率直に共産主義への恐れと教皇がその共産主義の蔓延に反対していることに信頼を表明しました。

その次の日7月11日、大阪の「軍のカテドラル」において、大阪教区パウロ田口司教主催による公式の歓迎会が行われました。この機会に話をするにあたり、レディ司教は、民主主義において宗教の必要性を強調しました。司教は、「戦後の世界の再構築のこの時に、アメリカのカトリッ

ク教徒の精神は、故ルーズベルト大統領がアメリカのカトリック司教達に対して述べられた言葉の中に非常によく表されています。『私達は、勝利して復讐を企てることなく、むしろ、キリストの精神が人の心と国を支配する社会秩序の構築を模索するであろう。これこそが世界の唯一の希望である - 平和が真に正義の実りである社会を創造するために - 』

「ありがたいことに、アメリカでは教会は繁栄しています。アメリカ政府のもと、私達はキリストの教えを表現する最大限の機会があります。皆さんがここでキリストの教会を発展させるための努力の中で、アメリカのカトリック教会の司教・司祭達、および信徒達の献身的な援助を受けることになるでしょう。

私達は、圧政的政治は宗教なしに存続しますが、民主主義ではそうではない事を常に記憶しておかなければなりません。」

福岡訪問に関連する興味深い経験は、福岡県知事野田俊作氏との面談でした。満州と韓国からの難民の送還の窮状を緩和する日本政府の努力を知った時からです。

- 10 -

福岡の港で6隻の汽船を見ました。それぞれの船には、ぼろぼろの服をきた1500人の送還者達が乗船していました。(そのうちの1隻は3人のコレラ患者の乗船が確認されたために韓国に引き返させられました。)野田県知事は、ロシア人は送還される日本人から、彼らが身にまとっていったぼろを除くすべてのものを奪い取ったという話をしてくれました。彼の任務は、これらの貧しい人々に食料を供給し、衣服を提供し、そして、国内の彼らの目的地まで送り届けることでした。男性への衣類の提供の際、処分する50万人分の日本軍の軍服がありましたが、女性と子供達の為に衣類を調達するのは困難でした。(この事実は War Relief Service, NCWC (10) の知るところとなりました。そしてこの機関はワシントン DC の国務省の許可が下り次第、日本に向けて緊急物資を送る準備がなされています。)さらに知事は、満州から277人の孤児が最近福岡に上陸したと言いつ添えました。

長崎における視察は非常に感動的でした。到着まで、駅で私達を出迎えてくれた数百人のカトリック教徒達は、遅れた汽車を待って2時間近くも立ち尽くしていたということを後になって知りました。酷暑にも関わらず、多くのカトリック教徒達は、彼らのほとんどは貧しいのですが、私達のために準備されていたあらゆる行事に参加してくれました。その行事というのは、レディ司教司式によるカテドラルでのミサ(11)、浦上の被爆したマリア会の大学(12)でのオハラ司教司式のミサ、その浦上周辺の谷間に位置する修道院の祝福(13)、浦上仮教会の礎石の祝福、前の教会の焼け跡の近くに建築中の別の小教区訪問、大浦教会での聖体降福式等が挙げられます。

最も感動的な出来事は、浦上仮教会の定礎式でした。仮教会の前の教会は

- 11 -

日本最大の教会であり、かつて、6千人の信徒を収容することができました。浦上一帯に住ん

でいた一万人の信徒のうち、原爆によって八千人の命が失われました。この信徒達の新しい仮教会の礎石がアメリカの司教によって祝福されるということは、浦上の信徒と山口司教の願いでした。600人以上の人々がこの定礎式に出席しました。出席していた人々は皆、彼らにとって大切な誰かを失っていました。一人の司教は、原爆によって200人（14）の親族を失ったと言っており、しかし、浦上のカトリック信徒達は、彼ら自身のことを「殉教者の子孫」と称し、神秘的な洞察力を持っています。伝道師パウロは、その地元の教会の信徒を代弁して、この犠牲となった信徒のことを「完全な宗教の自由の素晴らしい贈り物を勝ち取ったことによる大きな犠牲」と表現しておりました。

彼らが現在負っている原爆の惨状の十字架を受け入れる際に、私達が少し離れて日本人の精神性を十分に理解することは困難であるので、長崎への原爆投下によって生み出された「罪の償いの犠牲」という神秘的な解釈を挿入することはもっともなことだと思う。

そのことは、原爆犠牲者のために浦上教会の焼け跡で捧げられたミサ（15）の際に読まれた弔辞の中に述べられています。その人物はパウロ永井（隆）で、日本軍の医官でした。弔辞は以下の通りです。（16）

「1945年8月9日午前10時30分、東京の最高司令部では、戦争を続けるか終わらせるか決定する会議が行われていました。

その会議の中で言明された問題は、日本の運命を決定するということだけではなく、世界に新しい平和をもたらすか、あるいは再び、人類を血の地獄に再び置き去りにするのかということでした。高官達が平和か戦争を決定しようとしていた丁度その時、11時2分、1発の原子爆弾が浦上教会の上空で炸裂し、瞬間に、およそ8千のカトリック信徒の魂を天国に送り、

- 12 -

数時間の間にその一帯を焼き尽くし、灰塵に帰してしまいました。

壮麗な浦上教会から炎が大波のように押し寄せてきた真夜中、天皇陛下は軍の指導者に圧力をかけ、戦争を終結する意思を宣言したのでした。

1945年8月15日、天皇陛下はラジオから（日本の歴史の新しい手段）、日本国民に戦争の終結を宣言し、平和への希望を公表しました。天皇陛下は世界に平和をもたらすことを希望し、毅然としてそう決断されたことを宣言されました。この日は、聖母マリアが天にあげられた被昇天の祝日でした。私達は、その時、日本は、そして特に浦上教会は聖母マリアに捧げられていることを思い出しました。このことを不思議な摂理と思うか、あるいは、あらかじめ定められた摂理と見なさないほうがよいのだろうか？

原爆は戦争の最後の作戦でした。原爆投下後、世界のいかなる場所でも大規模の戦闘は起こっていません。その爆弾は町の中心に投下されることになっていましたが、悪天候のために教会の500メートルほど前に落ちたという事実が、浦上の犠牲と戦争の終結の間に深いつながりがあるということを私達に信じさせます。要するに、この戦争は人類の罪に対する罰であり、浦上は、



汚れなき子羊として殺され、犠牲の祭壇のいけにえとして焼かれたということを私達は信じました。

真の智慧の実を得ようとしたアダムとイヴ、弟アベルを殺したカインの罪は、神の子供として等しく私たちに受け継がれています。一方これに加えて、私達が、第2次世界大戦を繰り広げていた時、愛の掟に逆らって行動してきました。

戦争は1931年、満州事変で始まり、14年も続きました。

- 13 -

その戦争を終わらせるために 私達の罪を償うだけではなく、主なる神に、特別な犠牲を捧げる必要がありました。これまで、多くの町や都市が破壊されながら、戦争を終わらせる多くの機会がありました。しかし彼らは相応しい犠牲として受け入れられず、私たちの主は許しを与えられませんでした。しかし、浦上の犠牲で、主なる神は、天皇陛下のお心に戦争の終結の必要性を印象付けるのが相応しいと思われました。戦争は天皇陛下からの直接のご命令によりついに終結しました。

宗教の自由がなかったこの国で、豊臣、徳川の迫害の生き延びたキリスト教徒達は、明治以来如何なる軍勢力にも屈することはありませんでした。そして彼らは400年以上も殉教者の血とともに生きてきたということを私達はいうべきかと思います。浦上小教区は、彼らの信仰を完全なものとして守り続け、主の祭壇に犠牲として捧げられるために、世界から選ばれた子羊の群れとなりました。

ついにその世界は、戦争の影を放棄し、8月9日、この教会の前でとてつもなく巨大な炎と共に平和の光が現れました。

私達はそのことを心の底より、美しく、純粋で、そして聖なる印象があると感じていました。

西田神父、玉谷神父、十字会の修道女達、マリア会と幼きイエズスの修道女達よ、教区の年長者達、カテキスタ、親族、友人達、愛する家族よ - 私たちは皆さんを思い出す時、素晴らしい人のことのみに目を向けます。あなた方は、聖母マリアの祝日の準備として許しの秘跡を終わり、あるいは許しの秘跡のために心の準備を済ませていました。8000の魂は、確かに、同じ雲で天国に旅立っていきました。敗戦を知ることなく、この世を離れた皆さんは幸いです。もし後に残された私達が今の状態とあなた方の状態、つまり神の家に入っている汚れなき子羊を比べると、悲しみとこの窮状に対する悔悟の念を感じざるをえません。

- 14 -

日本は戦争に敗北しました。そして浦上一帯は廃墟と化しています。私達の前には どこも廃墟が広がっております。近づいている冬の雲がこの状況を嘲笑っているようです。家はない、衣服はない、壊れた屋根瓦、不毛の地、さらに悪いことに、今後数カ月誰も耕作もできない。どうして私たちは、あの日にあなた達と一緒に死ぬことができなかったのだろうか？

私達の罪の大きさを認識した今、罪を十分に痛悔していなかったこと、私達はまた、皆さんと

共に祭壇に捧げられるのに相応しくなかったのだと思います。

私達は、敗戦の暗闇を歩かなければならず、そしてポツダム会談によって確定した賠償の負担を負うことになるでしょう。しかし、この同じ困難な道は 天国にいる皆さんとともに、罪の償いを通して永遠の幸福に私達を導く同じ道ではありません。

「悲しむ人は幸いである。彼らは慰めを受けるであろう。」(マタイ V - 5) この言葉を信じ、希望に強められ、単純な勇気をもって、重荷を負うでしょう。嘲笑され、打ちのめされ、苦しめられ、血と汗にまみれ 愛の心地よさを渴望しながら、私達は、カルワリオへの道を歩むキリストとともに、その賠償とその重荷を負うでしょう。私達は、聖母マリアの取り次ぎを通して、私達のために天の父からの力と勇気を得るよう皆さんにお願いします。

本日、長崎教区の依頼により、浦川司教(17)は皆さんのためにこのミサを捧げ、葬儀を司式しました。浦上出身の司教、司祭、修道女達は、八千の十字架を皆さんのために捧げ、そして、まだ煉獄の浄化の炎の中でまだ苦しんでいるかも知れない人びとのために熱心な祈りを捧げるために、生き残った2千人の教区民とともに心を合わせるためにここに集まりました。

いつも神のご意思の前に頭を垂れ、神への焼き尽くす犠牲として浦上の教会を選ばれたことに神に感謝を捧げましょう。皆さんを通して、世界に平和を、そして日本に信仰の自由を与えられた神に感謝を捧げましょう。

- 15 -

天国へ旅立った忠実なる魂が、神の憐みにより安らかに憩われますように。アーメン。」

#### 「私の宝物」(18)

私は、何か宝物が残されていないか気になっていた  
私の家が燃え尽きた後に。  
私は、灰を引っ掻き回し、瓦を動かし  
そしてくまなく探した、しかし、宝物は何もなかった。  
私のメダル(勲章)も溶けて、形さえもなしていなかった。  
妻の骨は白かった。

私の富と名誉は失われた  
私の愛する妻の命さえも  
他のものとともになくなった。  
しかし1つだけ失われなかったものがあつた。  
それは凜として立っている十字架  
灰塵のなかに光のように。

秋の朝の雨はわびしい、  
夜の風は冷たい、  
しかし柱に十字架をかけ、  
ロザリオの玉を繰ると、  
私はまるで、天の父が私の前に立っておられるように思う  
私の前に。  
そして、聖母マリアが私と共におられるように、  
そして、それが私の慰めと幸せとなっているように思う。  
わたしはこの暮らしを幸せに思う  
この原爆の荒野のこの家で。

- 16 -

東京以外の最終の訪問地は仙台でした。そこで、活動している仮司教座聖堂、教区の建物、カテキスタの家に行きました。浦川仙台司教、引退した早坂長崎司教より、米軍関係当局が、教会活動の遂行のために外的な組織を回復し、またそこで働く司祭、修道女達のために、食料と身体的な快適さを取り戻すために、大いに貢献しているとの報告を受けました。特に、ニューヨーク出身の将校、Lt. de Facundio (中尉) の働きは称賛に価するものでした。Lt. de Facundio 中尉は、仙台のすべての教会の施設の必要を調査し、この要望に応えるために彼ができることを実践しました。(同じような話は日本中のあちこちで聞かれました。司教達は特にカトリックのチャプレン達を必要としていました。そのチャプレン達は、司祭や修道女達の苦悩を軽減し、また、司祭や修道女達が、貧しく恵まれない人々の世話をすることを支援するために、彼らの権限で力の及ぶ限りのことをしていたからです。)

他の2つのことが例外的な重要性を持つものとして心に特に思い浮かびます。その中の1つは、7月19日の天皇陛下の拝謁です。天皇陛下は教皇ピオ12世に対し心温まる称賛の意を表され、特に平和に対するたゆまぬ努力について触れられました。天皇陛下はまた質問に答えて、教皇の回勅をまだ受け取っていないとお話になりましたので、私達は陛下にお送り申し上げることを約束しました。(Stitch 枢機卿は、特に、最近の4人の教皇の回勅を含む *Principles for Peace* の装丁版の出版に備えて持っておられます。)天皇陛下はまた、日本の、特に現時点で日本の司祭、修道者達によって行われている教育と社会福祉活動に対し、感謝を表明されました。

- 17 -

その前日、東京のある修道院の壁に皇室ご一家の写真が掛けられており、修道女達は毎日皇室の安寧を祈っていることを知った事をお知らせすると、陛下は喜ばれ、その修道院の名前をお尋ねになりました。

陛下は25年前、皇太子時代に教皇ベネディクト十五世聖下に拝謁なされたことをお話になりま

した。陛下は、これ以上の名誉はなく、その謁見の様子がいつもありありと目に浮かぶとお話になりました。さらに、陛下はパチカンで、かつて歓迎を受けたただ一人の皇族であるとも話されました。

もうひとつの素晴らしい出来事は、7月20日の土居大司教による歓迎会でした。東京とその他各地からのカトリックの著名な人々に加えて、政界、社会、有識者、産業界等、多くの各界最高の代表者がそこに出席していました。

この機会になされたカトリック教会に対する素晴らしい称賛の言葉は、天皇陛下の義理の妹君、高松宮妃殿下から発せられました。妃殿下は「私達は日本の敗戦を神に感謝しています。敗戦は、日本に、唯物論的な運命、日本人の精神には合わない(もの)をもたらしていた軍勢力を破壊しました。日本の敗戦は壊滅的でした。私達は非常に苦しんでいました。そしてこれからももっと苦しむことになるでしょう。しかし今私達は、日本の素晴らしい精神的な未来が見えます。そして、カトリック教会のみが、その目標に到達するように私達を導くことができます。」

妃殿下は、聖心会修道院で毎日、貧しい人々のために裁縫をしておられること、この仕事を喜んでおられることを付け加えられました。(ある司祭は、妃殿下は現在、皇室の妃殿下の中で一人、カトリック教について指導を受けておられるということを教えてくれました。)

- 18 -

(また、歓迎会参加者から、この歓迎会が、以前に会ったこともないような多くの日本人の指導者達を一堂に集めたという点で、異例のことであるということを知りました。過去の厳格な社会習慣が、独自のカテゴリーの中でグループを保ってきたので、私達が経験したような民主的な集まりは、道徳上不可能であったとされています。)

歓迎会で受けたカトリックの社会的な教えの中で、善意や関心の表現は、私達はそう希望しますが、日本のカトリック教会の未来において実を結ぶことでしょう。

ここまで、本報告書は大部分客観的で、視察した機会について詳しく列挙した記録です。私達が見、聴きしたことについての印象と判断を提供することに対して、本視察旅行が19日に過ぎなかったこと、宣教生活と東洋での諸事情の経験不足が、私達がいかなる判断を試みることに對して、慎重でなければならないということが議論されるかもしれません。

その一方で、私達は確かな印象に圧倒されています。それは私達のそれらのことについての判断は、時に異論なく、また他の時にも、ほとんど異論なく 非常に多分野の相応しい適任の第三者に承認されているということです。

私達の最初の強烈な印象は、これが日本のカトリック教会の時であるということです。

マッカーサー元帥は、一挙に、数千人のカトリックの宣教師を送ることを呼び掛けるようにと私達に要請しました。マッカーサー元帥は、「日本人の心をカトリック教会に向かせるのに1年ある。日本人の敗北によって重大な真空状態、いかなるものも急速に入りこむ精神的な真空状態が生じている。私はプロテスタントです。

- 19 -

しかし私は、フィリピンで、カトリック教会が東洋人のためにしたことを見てきた。だから、私はあなた方が日本人のために何ができるかがわかる。私は、カトリックの宣教師は言うまでもなく、プロテスタントの宣教師にも来てほしい。しかし、あなた方カトリックは罪の赦しがあり、そしてそれは東洋人の心に訴えるものがある。

そして、世界平和のために、カトリック教会はこの機会を軽視してはならない。日本人には東洋のいかなる民族に対するリーダーシップでも卓越した資質がある。そして、彼らのリーダーシップは、時が来れば、再び回復してくる。その時まで、もしそれがキリスト教的リーダーシップであれば、東洋は安泰であろう。」

日本のカトリック教徒の間に、聖フランシスコ・ザビエル来日400周年には、大きな宣教の実りを見るであろうという神秘的な思いがあります。日本の非カトリック者の間には、強い魂の探求心があります。カトリックの書籍がどこでも引っ張りだこですが、手に入る数は悲しいほどに少ない。日本に紙を送る方法を探さなければなりません。要理の本さえも入手できません。長崎を除いて全国の司祭修道者は、並はずれて多くの要理教育を報告しています。(長崎で、言及されている唯一の増加は“Old Catholics” - 潜伏キリシタンの集団からです。その潜伏キリシタンとは、19世紀に宣教活動を再開するためにやってきたフランス人司祭の權威を認めることを拒否した聖フランシスコ・サビエルからの改宗者の5万人の子孫達です。)日本のその他の地域では、司祭、修道士、修道女達は、要理教育に疲弊しています。学校での宗教の授業に加えて、(公的には禁止されているが、現在では、異教徒の非常に多くの生徒が出席している)個人やグループでの要理教育が何時間も終わりなく行われています。東京のある修道院では、成人の要理教育の人数は300人でした。京都では、司教(教区長)が男女30人に、週日の朝10時に要理を教えているのを見ました。

- 20 -

要理教育の講座は長い。アメリカのそれよりずっと長い。そのアメリカでは、初心者(求道者)は、通常何を頼りにするか多くのキリスト教の原則を持ち合わせています。このことが、男女の宣教師の大幅な増加を要求しているようです。ここには、言語習得の困難さがおのずと明らかになります。ヨーロッパやアメリカからの教師は、教える前に、3年間、日本語を習得することに専念することが慣習になっています。4年間、英語で教育を受けてきている日本の子ども達は、英語を手段として多くの教育を受けることはできるし、また喜んでそうしたいので、宗教の教師(宣教師)が日本に来て、直ちに英語で教え始めることは可能であると多くの識者達は話してくれました。もしこのことが事実と反しないならば、現在、カトリック学校で、日本語を使って教えている多くのヨーロッパやアメリカからの教師(宣教師)達は、彼らのすべての時間を宗教教育に時間を割くことに自由になるかもしれません。

もう1つの非常に強い印象は、アメリカ人のカトリック宣教師達が大いに歓迎されているということです。最初の土井大司教訪問の際、私達は、土井大司教にどの国の宣教師を送ってほしい

かを率直に話してほしいと尋ねました。大司教は、「どの国からでも。」と答えました。アメリカ人の宣教師に関する具体的な発言を求めて、「どの国の宣教師も歓迎されるが、アメリカ人宣教師は他のどの国からの宣教師よりも歓迎されるだろう。日本人はアメリカ人に対する特別な好意を持っている。これは、まず第一に、マッカーサー元帥の賢明な指導に起因している。アメリカ人は真に私達の解放者であったと思っている。即ち、彼らは軍国主義者の権力を打ち砕き、歴史上はじめて、宗教の自由をもたらした。さらに、米兵、つまり一般の兵士達は友好的で親切である。(19)そして、彼らは、カトリック教会の不足を補って、日本人を教化(啓蒙)してきた。

- 21 -

事実、兵士達の模範は、日本のカトリック教会で普通の日本人が示している大いなる関心に多少責任がある。彼らは、まるで教会の存在を知らないがごとく、教会の前を素通りするのに慣れていた日本人を教会に導いた。米陸軍や海軍のカトリックのチャプレン達は、軍当局がいずれ他の方法で廃棄する余剰品と‘悪くなりそうな食品’を小教区や修道院に届けることによって、文字通り私達を生かしてくれました。」

土井大司教の真剣な言葉から受けた第一印象は、私達の日本の視察旅行の間に、絶えず確認されました。全ての国からの宣教師達は大いに歓迎されるでしょう。特にアメリカからの宣教師達は歓迎されるだろう。同様に南米の宣教師達についてもいくらかの言及がありました。米軍当局はまた、連携役として高位聖職者の可能性についても触れていました。しかし、彼らは米軍政府内よりもむしろ日本の教会内の組織の方が活躍の場があると提案をしていました。この心情は、多くの宣教師共同体の代表者達により、同盟国の宣教統制の期間、特に望ましいこととして、賛成の意見が表明されました。このことはまた、日本人信徒によっても話されていました。そのことは、日本の教会内の組織のなかでも、教皇使節とも議論ははなされていませんでした。この話題は決して私達によって持ち出されたことではなく、私達が面談をした人々によってしばしば提案された自然発生的な提言でした。

誠実と忠実を持って、日本で働いている外国人宣教者の会の間で、日本人の人材による現在の体制の多少の修正によって、宣教は恩恵をもたらすという強い信念があるということを報告するべきであると思います。外国人聖職者による組織へ回帰すべきであるという提案をする人は誰もいません。まさに正反対です。

- 22 -

現在の教会の権威は確立されており、概してよく統治されているという全体的な感触がありました。ごく一般的に提案されたことは、新しい宣教区を創設し、それを外国宣教会に委ねるということでした。その宣教区は、通常の方法で、布教聖省のもとで運営するというものでした。そのような新しい地域は、ゆくゆくは、発展の自然な過程で、日本人聖職者と司教団に委ねられることになるでしょう。

現在のこの制度の修正を提案している人々は、宣教生活は特別な召命であり、そして、教会の発展の現状で、宣教師への召命は日本人の間よりも古いカトリック国の方がより受け入れられ

ていると思っています。後者は宣教師の努力によりも小教区の生活（活動）の方によりに適している」と議論されています。外国人宣教師達は、宣教の始めからすでに発展し、確立した小教区を日本人に引き継ぐことを喜んでいますが、しかし一方、その宣教師達は新天地に押し出されることになります。

それぞれの宣教会が、その宣教会固有の宣教の方法を持っており、その方法が成功を収めたことが証明されているので、宣教師達は、会の精神を十分に理解している彼らの長上の下でうまく機能していると言ひ添えました。

さらなる提案は、示唆されている新しい宣教地域には多数の課題があるということです。宣教師は地方で必要であったのに加えて、他の宣教師達は日本人の司教のもとに派遣され、当座必要とされることは何でも行うことができるように、彼らの個別の権威のもとで派遣されることができるように。

- 23 -

私達の判断では、これらの提案には利点があると思います。そして、これらのことは教皇庁に申し出るべきであると思います。私達は日本の教会が日本人の人材によって非常によく運営されていることを確かめることができうれしく思います。しかし、ほんの150人の日本人司祭の中から、15人の司教を選び出す負担もまた実感しています。さらに、日本はまだ圧倒的な宣教国です。人口7千万～8千万の中の最大12万のカトリック人口で、宣教の場は大きいし、そして、特に真の信仰の広がり到大変好ましく見えるこの時に、普遍教会に最高の人材を求めています。

日本の教会の物質的な必要性という点では、（日本カトリック復興委員会メンバー、別紙報告書類作成者等）他の人々から知り得たことのみを報告をすることになります。前に触れているように、日本カトリック復興委員会の報告書（別紙B）（20）を、この報告書に追加しました。私たちは、個人的に提供された個別の報告書（別紙C、D）（21）を加えることにします。現時点で多額の資金を送ることは賢明ではないでしょう。円に対してドルの恣意的な価値は、市場の価値からあまりに離れすぎています。（公式の交換レートは1対15、一方、ブラック・マーケットレートでは、1対40～50。銀行家達は、レートを1対70に固定したいと考えている。）物資は必要とされていますが、輸送する許可は、まだ保留されています。

私達は、必要な伝達と日本の宣教に必要なとされる援助物資に悪影響を及ぼす重要な政策の修正に関して、日本の教会の宣教のために必要な援助物資と必要なコミュニケーションに悪影響を与える重要な政策の一部改正についてのマーカーサー元帥が率直に語られた覚書を別紙F（22）として付け加えます。日本の教会は地方の支援の手段を見過ごしてはいません。

- 24 -

カトリックの諸施設に、軍の将校や関係者達、特にチャブレンによってなされた大きな支援についてはすでに述べました。廃材が多くの施設を建設するためにすでに利用されています。建築資材が重要な（緊急支援）リストから放出されると、日本では、疑う余地なく資材の多くは倉庫にあり、そして、極東の他の国々では、アメリカでするように、高い優先順位の格付で宗教や教

育関係の民間人利用者に放出されます。

さらに、カトリック教会の社会・教育活動に感銘を受けたのですが、地方の非カトリック者は、カトリックの諸施設を支援するために彼らの資産を寄付しています。大阪では、ホームレスの家族や孤児たちの仮住まいとなっている2つの施設を訪問しました。その施設は、仏教徒の（経営者）によって建設され、日本人のカトリック修道女によって運営されていました。東京での土井大司教によるレセプションで、私達は、挨拶のために京都から来ていた別の仏教徒に会いました。その人物は、3つのカトリック女子校、小学校、中等教育校、大学を創設し、京都帝国大学にスコラ哲学（講座）を設立しました。

Pouliot 神父（OP）、アメリカ人将校、特にチャブレン、最高司令官付民間人、アメリカの友人達の提案で、裕福な非カトリック者により、カトリック慈善事業への寄付について話してくれました。

語るに値する人物は、米海軍の Captain Decker です。彼は横須賀の海軍基地の指揮官です。この基地は日本人の目からさえも遮蔽されていました。Captain Decker はカトリック教徒ではありませんが、日本人の修道女を横須賀の海軍病院に配置しました。そして、日本政府に修道女達にその不動産の権利書を譲渡するようにと要請しました。

- 25 -

彼はまた、大学の設立のために、基地そのものをイエズス会に、隣接する海軍の大学院を Dames de Saint Meur に女子大学として譲渡するべきである要請しました。この要請を裏付けるために、彼は日本政府に対し、その地所は産業や軍事目的に決して利用できないこと、また、文化的機会を長く奪われている周辺地域の1万人の人々には、日本で最も優れた教育施設が提供されることを確認することが、私の目的であるということを日本政府に通知をしました。

閣下、これは日本視察の報告の要約です。私達にこの任務を委ねることによって示されている温かいご配慮に対し感謝の意を表します。そして、この私たちに知的、霊的恩恵を与えてくれた視察の機会を深く感謝します。駐日教皇使節閣下からの個人的な温かいお言葉と日本の司教団からの兄弟的な挨拶をお伝えいたします。

## 注

- (1) 本報告書は、The Catholic University of America, American Catholic Research Center (Washington, DC, U.S.A.) において2014年9月3日入手した。アーカイブ所蔵の本報告書本文は、カーボンコピーと思われ、非常に不明瞭な部分が多かったが、原稿起こしを試みた。また、別紙Eが欠けているのではないかとと思われるので、報告書草稿の一部、本文26ページの翻訳を試みた。また数か所、明確ではない単語があることをお断りしておく。翻訳文の数字は、報告書草稿のページ番号に合わせている。

本報告書は、オハラ(John Francis O'Hara)司教(バファロ 教区、ニューヨーク州：当時)がレディ(Michael Joseph Ready)司教(コロンバス教区、オハイオ州：当時)を伴って、戦直後の1946年7月、日本のカトリック教会の戦禍の状況の視察のために来日し、駐米教皇使節 Amleto G. Cicognani 大司教に提出したものである。視察の目的と経緯、人選、長崎訪問等の詳細の考察は、拙著「オハラ司教の遺産 - 学園創立80周年によせて - 」



『純心人文研究』第22号 平成28年2月発行を参照

- (2) 駐米教皇使節 Amleto G. Cicognani 大司教（在任期間：1933年～1959年）

日本の教皇使節（1919 - 1921）であった Fumasoni Biondi 枢機卿の後任としてアメリカに着任。1958年枢機卿に親任される。

- (3) 報告書（草稿）の目次は、報告書の内容の理解のために濱田が作成し、資料1として収録した。

- (4) 日本視察全日程とカトリック新聞記事を要約して対照表を作成し、資料2として付記した。カトリック新聞の記事と報告書草稿の日程の翻訳を、情報を訂正し、補いあい、理解しやすいように併記した。

- (5) 昭和21年（1946年）1月からバチカン市国代表となっていたブルーノ・ピッター師（イエズス会）が委員長になり、占領軍司令部から3月25日、正式の認可を得て、日本のカトリック教会の復興ために組織された委員会。事務局は上智大学に置いた。1946年7月のオハラ・レディ両司教の日本視察旅行の計画、旅行の同行、報告書作成等、日本の教会の復興事業に重要な役割を果たした。その活動に対し、昭和23年4月26日布教聖省長官フマソニ・ピヨンディ枢機卿、つづいて5月10日教皇庁より感謝状が贈られた。『教会秘話』志村辰弥著1991年、p199 202、聖母文庫、初版は1972年「中央出版社より発行」

- (6) 上智大学と考えられる。

- (7) 別紙B、注（3）の目次の ～ 参照

- (8) 聖フランシスコ・ザビエル来日400年祭、1949年5月29日～6月12日

聖人の「聖腕」と教皇特使ギルロイ枢機卿（オーストラリア、シドニー大司教）が来日し、式典は長崎から始まり、旧浦上天主堂の廃墟跡に仮祭壇が設けられ、2万人の信徒が参集して荘厳ミサがささげられた。「長崎純心聖母会の五十年」p 37

カトリック教報（長崎教区発行）昭和24年6月15日発行

- (9) オハラ・レディ両司教日本視察は、ピオ12世教皇が米国司教団に要請して実現したものである。

- (10) War Relief Services,

NCWC: National Catholic Welfare Conference

- (11) 大浦教会：当時のカテドラル

- (12) カトリック新聞の記事から、長崎市本原町のフランシスコ会でのミサと思われる。

- (13) 純心聖母会（当時長崎市家野町、現在の文教町）の復興に先駆けて建設されていた幼稚園園舎を祝福したと伝えられている。『純心聖母会五の五十年』p .139より

- (14) 印字が不明瞭でわからない。200人は多すぎるのではないと思われる。

- (15) 1945年11月23日、浦川仙台司教（浦上出身）司式による追悼ミサ

- (16) 本文ページ番号11の終わりから、15ページ1行目の文章の内容は、永井隆博士が、前述（15）の浦上教会での追悼ミサで読まれた弔辞の全文が英語に翻訳して収録されている。本翻訳は、報告書草稿の英文からさらに日本語に直したものである。永井隆博士は、1946年7月2日、長崎駅で倒れ、長崎大学病院に入院中であつた。オハラ司教と面会したという記録はない。弔辞の原稿を手に入れて英語に訳し、報告書に書き込んだとおもわれる。

- (17) 浦川仙台司教（浦上出身）司式による追悼ミサ 1945年11月23日

- (18) 「わがたから」 - 自由詩 -、永井隆全集（第 巻）pp 536 537

昭和二十年11月末日 浦上にてよめる。『新しき朝』に収録されている1篇、ここでは報告書から日本語に翻訳したものである。

「わがたから」 - 自由詩 （以下原文）

わが家のやけたる あとに  
残りたる たからやあると  
灰をかき  
瓦とりのけ  
さがせども 宝はあらず  
勲章は焼けて形なく

わが妻の骨のみ白し

富も ほまれも あなあわれ  
いとしきものの いのちさえ  
すべて ほろびて 過ぎたれど  
亡びぬものは ただひとつ  
灰の中より 光りつつ  
銀の十字架 あらわれぬ

時雨ふる 朝はわびしく  
野分ふく 夜は寒けれ  
十字架を 柱にかかけ  
こなたすを 爪繰りをれば  
おん父と共に 吾あり  
おん母と共にあり  
あな楽しもよ  
原子野住居

- (19) バーン師（メリノール会）は1935年3月来日し滋賀県にて宣教を始めた。

1941年の太平洋戦争の開戦でも帰国することを拒否し、1945年8月の終戦まで高野教会（京都教区）に軟禁状態にあった。終戦時、占領してくるアメリカ軍に「上陸してくる米兵たちよ、守れ、厳重な規律」と統制された平和な進駐を、ラジオを通して、洋上の艦隊に向かって呼びかけた。朝日新聞1945年8月19日（日）ラジオ（東京、NHK）『パトリック・バーン司教（M.M.）の足跡 - 大和撫子たちの恩人 - 』（プリント） 志村辰弥著『教会秘話』pp.182-186

- (20) 別紙Bは、Private Report of the Rehabilitation Committee（日本カトリック復興委員会）による作成、注（3）：

資料1参照

- (21) 注（20）参照

- (22) 別紙Cは、山口司教による長崎教区の被災状況の報告、注（3）参照

別紙Dは大阪教区と四国の再建について、注（3）参照

- (23) 別紙Fはオハラ・レディ両司教からマッカーサー元帥に書かれた覚書、注（3）参照

## 参考文献

宮本敏行『パトリック・バーン司教(M.M.)の足跡 - 大和撫子たちの恩人 - 』（プリント）当時朝日新聞東京本社社会部）が昭和63年から2年あまりにわたり、秋田湯沢台にある修道院の黙想誌「湯沢台の聖母」に連載したものの。

J.T エリス他（2006）『キリスト教史10 現代社会とキリスト教の発展』上智大学中世思想研究所 編訳／監修

カトリック新聞 長崎純心大学所蔵

カトリック教報 長崎純心大学所蔵

純心聖母会50年誌編集委員会（昭和59年）『長崎純心聖母会の五十年』

永井隆 永井隆全集（第3巻）（2003）サンパウロ

志村辰弥著『教会秘話』（1991年）聖母の騎士社

（2016年10月30日 受理）

資料1 (報告書草稿目次)

**Report of the Visit  
of Bishop O'Hara of Buffalo and Bishop Ready of Columbus  
to Japan - July, 1946.**

Submitted to : The Most Reverend Amleto G. Cicognani, D.D.,  
Apostolic Delegate to the United States,  
Washington, D. C.

1. Title	1
(Table of Contents Created by Yoko Hamada, ICM October, 2014)	(2)
2. Report Body	26
3. Exhibit A - Itinerary	4
4. Exhibit B - Private Report of the Rehabilitation Committee	62

of the Catholic Church in Japan, Tokyo, Japan 7, July, 1946

Bruno Bitter, S. J.

P. J. Byrne, M. M.

John P. Higgins

Edward J. Lambert

O. C. Morland

J. van Overmeeren, S. J.

Articles of Association of the Rehabilitation Committee of The Catholic Church in Japan

Purpose

Authority

Membership

Functions

Management

De lagatio Apostolica

from Archbishop Marella, Apostolic delegate to Fr. Bruno Bitter S.J.

27, March, 1946

General Headquarters Supreme Commander for the Allied Powers

25 March 1946

from Harold Fair, Lt. Col., AGD, Asst. Adjutant General

Table of Contents

Introduction

Opportunities

What is being done?

## Findings of the Rehabilitation Committee

### Short Outline of All Archdioceses(1), Dioceses(5), Vicariates(2) and prefectures (7)

Archdiocese of Tokyo  
 Diocese of Nagasaki  
 Diocese of Osaka  
 Diocese of Fukuoka  
 Diocese of Yokohama  
 Diocese of Sendai  
 Apostolic Vicariate of Sapporo  
 Apostolic Vicariate of Hiroshima  
 Apostolic Prefecture of Shikoku  
 Apostolic Prefecture of Nagoya  
 Apostolic Prefecture of Niigata  
 Apostolic Prefecture of Miyazaki  
 Apostolic Prefecture of Kagoshima  
 Apostolic Prefecture of Kyoto  
 Apostolic Prefecture of Urawa

### Short Outline of All Mission-Societies Working in Japan

Religious communities of men  
 Religious communities of women

### Statistics : Summary of All Mission Personnel

### List of War Damages to Dioceses, Vicariates, Prefectures

### List of War Damages to Mission - societies

### War Damages of the Religious Communities

### Appendix

List No. : Supply  
 List No. : Special Wishes

- |    |  |                      |
|----|--|----------------------|
| 5. | Exhibit C - Report on Damages suffered by the Diocese of Nagasaki, during the war.<br>By Paul Yamaguchi Bishop of Nagasaki | 4                    |
| 6. | Exhibit D - Reconstruction of Osaka Diocese and Shikoku Prefecture<br>Exhibit E  | 6                    |
| 7. | Exhibit F - AIDE MEMOIRE<br>To Douglas MacArthur<br>From John F. O'Hara, C. S. C. and Michael J. Ready                     | 1<br><br><br>(101+2) |

資料2 オハラ司教・レディ司教日本視察日程：カトリック新聞と報告書草稿の比較

(下：新聞発行日)	カトリック新聞要約：長崎純心大学所蔵	日本視察報告書草稿 別紙A 翻訳 アメリカ・カトリック大学所蔵：ワシントン、DC
1946年 1月24日	<p>教区連盟建設部は、戦災を被った教会修道院と関連諸施設の復興と及び布教陣の強化のため、米国カトリック教会側と連絡協議するために会合： 1月24日18：00～10：30、第一ホテルにて NCWC 米国理事団宛てに復興後援並びに高位聖職者の日本視察使派遣を懇請する書状に署名：1月29日発送 列席者： 日本側（6名）：マレラ教皇使節・土居大司教・シャンボン大司教 ロス司教 SJ・ピッター師 SJ・バーン師 MM 米国側（30名）：ランベルト師と他従軍司祭27名・検事ヨゼフ B キーノン氏 SCAP 法律顧問ヨゼフ・リーベルト氏ら</p>	
1946/2/17 3月6日付	<p>NCWC と連絡して復興後援の機関を設立することをリーベルト氏提唱 1月29日発送の書簡に3月6日付でピッター師に返信届く。 ニューオルレアンス：ロムメル大司教、内容は「援助をする。日本の教会がマ司令部と良い関係を築いていることに敬意を表する。アメリカの司教派遣は教皇庁にも相談する。」</p>	
1946/4/14	<p>教会関係の諸施設および布教事業の復興振作のため米国教会の協力を得るために「復興委員会」組織される。教区連盟理事会（3/10：14：00）； 3月25日付で「復興委員会」マッカーサー司令部より認可される。 内容詳細あり</p>	
1946/5/19	<p>教皇ピオXII世の命により 高位聖職者派遣の要請にカッシング大司教（ボストン）派遣の知らせ。 信仰弘布会の指導者、8月前は不可能であろう。</p>	
1946年	<p>クッシング大司教（ボストン）は来朝不可能になり オハラ司教（前ノートルダム学長・パファロー教区、NY） レディ司教（NCWC 総秘書：コロンバス教区・オハイオ）に決定 6月15日頃出発予定（米國公教會訪日使節）</p>	
1946/6/2		
1946/6/16		

7月2日 空路出発	マッカーサー元帥、米国陸海軍の許可により出発 (7/2～7/6 フィリピン独立記念式典出席) (米國カトリック使節：日本の教会の復興を援助するため戦後の現状と布教者実情を視察する使命を帯びて教皇庁の依頼とマッカーサー元帥と米陸海軍の許可により7月2日米国を出発、空路4日午後厚木飛行場に到着：カトリック新聞7/7の記事より) オハラ司教：1940年スベルマン枢機卿より従軍司祭総監督代理に任命される。	
7月4日 到着	厚木飛行場に到着： 迎え：教皇使節パウロ・マレラ大司教、 東京大司教区：土井辰夫大司教 宿舎：帝国ホテル	16:29 厚木飛行場に到着 迎え：教皇使節パウロ・マレラ大司教、 東京大司教区：土井辰夫大司教、ピッター師 SJ、バートン師 MM、オコーナー師 (チャブレン) ランバート師、 ヒギンズ氏 (裁判官) リーバート氏 ジョン・ヒギンズ氏：極東国際軍事裁判所米國委員 主席 判事
7月5日	東京教区視察：教皇使節マレラ大司教、東京大司教区：土井辰夫大司教 午後：日本カトリック復興委員会委員長：ピッター師 (SJ) の案内で教皇使節館 (麻生区新龍土町) と東京大司教館 (小石川区関口臺町) を訪問する。 午後5時頃：土井大司教 (陪席：荒井、志村、小林師) 30分程度会談 その後、聖堂の焼跡視察、大神学校予科、児童館の跡、レルド洞窟詣、 仮聖堂へ、 夜：日本カトリック復興委員会主催歓迎晩餐会 (帝国ホテル)	午前：教皇使節マレラ大司教、東京大司教区：土井辰夫大司教訪問 午後：日本カトリック復興委員会出席、報告を受け、日程について話し合う。
7月7日 7月6日 (7月7日)	午前：(土井大司教、ピッター師案内) 本所、浅草方面視察：浅草教会 午後：(ピッター師、志村師案内) 白百合高女、暁星中学訪問、麹町教会、 雙葉高女、光塩高女、高円寺教会、メルセス会訪問	10:00 本所、浅草、神田教会視察 13:00 昼食 General Eichelberg (第8軍) 15:00 学校視察：暁星、白百合、高円寺 18:30 カトリック復興委員会メンバーと夕食

7月7日	<p>日比谷公会堂にて両司教の歓迎式：オハラ司教新日本建設に協力を約す。 極東国際軍事裁判所ウィリアム・ウエップ裁判長、ジョン・ヒギンズ主席判事 ハネガン米国郵政局長官、田中文相夫妻、マレラ教皇使節、シャンボン大司 教、ロス司教 SJ、サレジオ會聖歌隊、 莊嚴ミサ司式：土井大司教〔補祭・田川マリア会管区長、助祭・新井師、副 助祭・長江師〕 侍者多数 歓迎式：司会 志村師 歓迎の辞：土井大司教、信徒代表：田中耕太郎、花束：聖心、雙葉の女生徒 （振りそで） 白百合と光塩の女生徒・献画目録贈呈（長谷川路 可画伯の大和絵【日本の聖母子】二枚を披露 オハラ司教返礼の挨拶</p>	<p>8：30 日比谷公会堂にて莊嚴ミサ 土井辰夫大司教、田中耕太郎氏、 オハラ司教による説教、講話 13：00 教皇使節との昼食 18：00 上智大学訪問、イエズス会士と夕食</p>
1946/7/14 7月8日		<p>7：00 オハラ司教、聖心会修道院にてミサ レディ司教 カトリックの病院にてミサ 10：00 オハラ司教 the Dames of St. Maur 学校訪問 13：30 マッカーサー元帥と昼食 15：00 学校視察：フロジャック神父、サレジオン、Adoratricas, St. Albert Home, 聖霊会、聖パウロ会 18：00 32名の陸海軍のカトリック・チャブレンとの夕食会 14：00 両司教は、シャンボン司教、ブレトン司教の訪問を受け る。 19：40 汽車で大阪に向けて出発 同行者：ピッター師 SJ、バーン師 MM、オコーナー師 （チャブレン） ランバート師</p>
7月9日 （火）	<p>オハラ司教：京都へ 朝8時：京都河原町教会到着、古屋教区長、バーン師、フエルゼツカー師の 出迎えを受ける。聖堂でミサ、 信徒への挨拶：スタインバック師通訳、 信徒歓迎式（傳道館）：古屋教区長挨拶、 信徒からの贈物：純日本製の祭服、 校祝を与える レディ司教：空路名古屋へ 観光ホテル滞在 朝8時：松岡名古屋教区長、ボンセレット神言会管区長、バツへ師の訪問を 受け、戦後の教区事情の説明をうける。</p>	

(7月21日)	<p>米軍名古屋憲兵隊長マホーニ大佐、オブライイン少佐、従軍司祭チョーシー大尉とともに主税町教会に到着、司祭修道女、信徒の出迎えを受ける。ミルバウエル師の案内で聖体訪問、市内教会連合の歓迎会に臨む。</p> <p>松岡教区長の挨拶（ラテン語）信徒代表直井豊氏英語歓迎の辞、堀川・竹山両嬢から花束を受ける。愛知名産七寶焼花瓶の贈り物、レディ司教：返礼の辞、次いで、八能教会、聖霊會本部訪問、11:45米軍第五空軍本部でミサ</p> <p>多治見修道院視察、3時名古屋に戻り4:30の汽車で大阪へ</p>	
<p>7月10日 (水)</p>	<p>オハラ司教： 西本願寺にて大谷光昭師、醍醐派岡田管長ら主だった各派60名の代表と 会し、メッセージを送る。 (真に正義と平和との神国建設のために相携えて進みたいとの希望を述 べる。)</p> <p>午後5時：京都から大阪着： バーン師、オコンノー師同伴（古屋司教同行） 田口大阪司教、小林、 上中師に迎えらるる。 香里聖母女学院の歓迎会、香里教会、新大阪ホテルで田口司教、従軍司 祭団と晚餐・懇談、宿泊する。</p> <p>レディ司教は名古屋視察から合流して宿泊</p>	<p>6:30 オハラ司教京都到着、Msgr. 古屋訪問、司祭団、信者 に迎えらるる。ミサ、その後、教会、施設等を視察</p> <p>15:00 西本願寺にて仏教の代表者と会う。その後、Sister of Charity of Nevers (ヌベール?) の学校視察（大阪と京 都の間にある）</p> <p>18:00 車で大阪へ帰り16人のチャプレンと夕食 .....</p> <p>2:30 レディ司教 名古屋到着（観光ホテル）</p> <p>8:00 松岡（司教）入 神言会院長 Fr. Pache ホテルに歓迎のあ いさつ</p> <p>8:30 セント・メアリー教会で歓迎会、続いて名古屋の主な教 会、施設の視察</p> <p>11:45 軍の病院でミサ、その後、神言会多治見修道院へ</p> <p>16:30 汽車にて大阪へ出発</p> <p>20:42 レディ司教大阪到着：名古屋視察から合流</p>
<p>7月11日 (木)</p>	<p>大阪： 田口司教、小林、上中師らの案内で、玉造、川口、北野等罹災教会の跡、 愛徳会聖母病院（田邊） 邦・楯宿泊所視察、神学校訪問、信愛高女の 歓迎会、小林聖心女子学院の歓迎会</p> <p>午餐 夙川教会に立ち寄り、芦屋・稲畑二郎宅でのお茶会に招かれる。</p>	<p>午前：レディ司教、車で京都訪問 オハラ司教 Sisters of Charity の病院、孤児院、駅の診療 所視察、マリア会の学校、貧困者の保護施設視察（仏教に より創設、日本人修道女運営）</p> <p>13:00 聖心会にて昼食、関係者に面接、 その後、田口司教と神学校訪問、</p>



	<p>午後4時半：「ミリタリ・カテドラル」の教区歓迎会に出席 オハラ司教の聖体降福式、田口司教、稲畑二郎氏の歓迎の辞 両司教の答辞、記念品：羽二重の祭服贈呈 神戸視察は変更</p>	<p>神戸訪問、稲畑氏邸にて休憩（お茶）：稲畑氏邸の応接 間は飯の教会となっていた。</p> <p>16：00 「ミリタリ・カテドラル」で歓迎会 18：00 General Mullins（第25師団指揮官）と夕食 21：10 汽車で福岡へ出発</p>
7月12日 （金）	<p>夜9時：汽車（特別列車）で九州に向かう。</p> <p>大阪から福岡へ（特別列車）バーン師、ピッター師、オコンノー師同伴</p> <p>午後1時5分福岡（博多駅）着： 深堀司教、ロビヤール師、福岡地区在住従軍司祭団に迎えられ。 共進亭ホテル小憩、 午後：5時教区長館（浄水通り）サンズルピス神学校、泰星中學校、小神 学校、サンモール会修道院、福岡雙葉高女等視察 司祭館で記念撮影、</p> <p>その後晩餐会（出席者）：両司教：深堀司教、隨行の3師、福岡地区在住 従軍司祭7師、ロビヤール、ヴェイオンボア、マルタン、平岡勇、糸 永師、平田三郎師、伴東誠二師ら列席、 夜十時までも和やかな談笑がつづいた。</p>	<p>13：06 両司教 福岡到着 refugee ships で町、港視察、 Dames de St. Maur、マリア会の学校視察</p> <p>18：00 司教館にて歓迎夕食会</p>
7月13日 （土）	<p>朝：福岡</p> <p>オハラ司教：司教館でミサ、 レディ司教：サンモール修道院でミサ</p> <p>9時：野田俊作福岡県知事が来館、食糧事情、教会関係学校復興問題、 従軍司祭らとともに会談。</p> <p>県知事より贈物が贈呈される：博多織のテーブル掛け（記念撮影）</p> <p>11時過ぎ：司教館を出て訪問重貞会と大名町教会に立ち寄る。</p> <p>午後1時発の汽車で長崎へ向かう。</p>	<p>9：00 両司教は、福岡県知事の訪問を受ける。</p> <p>10：30 訪問会とカテドラルを視察</p> <p>13：46 汽車で長崎に出发</p> <p>20：40 長崎到着、長崎司教、司祭団、修道女達とおよそ1000人 の信者達の出迎えを受ける。 長崎司教館で夕食と歓迎会</p>

	午後7時12分の予定が2時間遅着（夜10時頃到着） 月明りの中、千余名の信者が迎える。山口司教、神父一行と、 ジープに分乗して大浦司教館へ、その後、歓迎晩餐会	
7月14日 (日)	オハラ司教：浦上フランシスコ会元雨天運動場でミサ 十字架、純心高女焼跡を視察、復興に先駆けて建てられた幼稚園を祝別 する。 レディ司教：大浦教会で9時のミサ  11時：浦上で落ち合い、仮聖堂敷地での歓迎式 オハラ司教は仮聖堂の礎石を祝別する。 市内信徒代表：前田得二氏、 浦上信徒代表：眞田清一氏の歓迎の辞、 花束記念品贈呈、 オハラ司教の答辞、山口司教通訳：随行者紹介 聖歌隊合唱：クリストス・ピンチト 終了 その後、常清女学校焼跡視察、フランシスコ会で午餐 2時半出発：仲町教会へ（数百人の信徒の出迎え） 大浦教会へ  レディ司教：大浦聖児会修道院、鮑の浦、 本河内：無原罪の騎士修道院 夕食後：長崎公教神学生の歓迎に臨む。 贈物：真珠の指輪（両司教） 教区の贈物：べっ甲のステッキとシガレットケース 夜十時の汽車にて福岡へ出発 (7月21日)	8:00 オハラ司教：フランシスコ会の焼跡にて浦上の信者とミ サを捧げる。その後、Divine Child の日本人修道女の仮 修道院を祝別する。（浦上の谷、地域） 9:00 レディ司教：大浦教会でミサを捧げる。  10:30 両司教：浦上の仮教会の定礎式を司式、その後、教区信 者による歓迎会  12:00 カナダ管区フランシスコ会にて昼食 15:00 仲町教会の歓迎会に出席、その後幼きイエス会、本河内 聖母の騎士訪問  18:00 大浦教会にて公式聖体幸福式、続いて神学校での歓迎会、 山口司教と夕食  22:10 芦屋基地（福岡）に向けて汽車で出発 翌朝到着
7月15日	福岡：芦屋飛行場から空路東京へ	10:00 General Eichelberger の自家用機で芦屋基地(福岡)を離陸 広島上空を500フィート（152.4メートル）上から2回旋 回する。 16:20 東京到着

7月16日	午後：東京公教神学校、カルメル会修道院、 教皇使節館、日本カトリック復興委員会で会議を重ねる。	15：00 東京公教神学校、カルメル会修道院訪問 11：00 General Charles A. Willoughby, G-2 MacArthur のスタッフ訪問 12：00 教皇使節と昼食 19：00 ノートルダム大学の卒業生に会う。
7月18日	横浜、横須賀訪問	9：30 カトリック復興委員会で会議出席 13：30 横浜、横須賀訪問 General Eichelberger の本部訪問、その後病院、学校視察 16：15 横須賀着、海軍基地訪問、 Chaplain Poznansky と夕食、続いてブレントン司教の新しい病院視察（前日本海軍病院）
7月19日	天皇陛下に拝謁	10：00 天皇陛下に拝謁 13：00 General Willoughby, General Romulo と昼食 18：30 日本プレス倶楽部で夕食会
7月20日	午前：浦和 午後：2時半（1時間）東京工業クラブ3階にて、記者団23名と会見（挨拶と質疑応答） 午後：4時：土井大司教主催両司教歓迎茶会（東京工業クラブ） 高松宮喜久子妃殿下、横原、横原国務相、田中文相、石橋蔵相ら政界、外交界、実業界、その他、名士200名参集、 米国側：ヒギンズ氏、レーベルト氏ら	14：30 東京工業クラブにて記者会見 16：00 - 18：00 土井大司教主催両司教歓迎茶会 各界の名士出席
7月21日	午後4時：在京聖職者団と非公式会見：上智学園庭園にて 土井大司教、内野教区長、在京司祭修道士修道女達約40名 親しく挨拶を交わし非常に喜ばれた。オハラ司教の祝福で6時閉会	7：00 レディ司教：聖心会にてミサ 9：00 両司教は横須賀へ 11：00 オハラ司教は海軍基地にてミサ、 Captain Decker と昼食 東京？

<p>(7月28日)</p>	<p>土井大司教は叙階式記念の朱塗の盃を贈呈する。</p>	<p>16:00~18:00 教区聖職者団・修道女による歓迎会</p>
<p>7月22日</p>	<p>夜：仙台へ向けて出発 朝7時10分仙台駅着（随行員同行） 浦川・早坂司教、ピソンネット、ディオソ、深澤、ウエイエット諸師 修道女多数の出迎えを受け、元寺小路教会でミサ、進駐軍司令部で朝食 10時半、浦川司教は教区統計表を示し、感謝と希望を認めたラテン語の歓迎 文を朗読し、懇談する。 （青森：小野師、盛岡：斎藤師ら出席） 午後：元寺小路教会、仙台高女（花京院通り）焼跡、百五郎、豊屋町教会 聖ドミニコ修道院視察 夜行にて東京へ出発</p>	<p>22:10 仙台に向けて出発 7:40 仙台到着し司教館訪問。司祭、修道女に会う。 全カトリック学校、施設訪問</p>
<p>7月23日</p>	<p>東京：</p>	<p>18:00 Commanding General と夕食 21:40 東京に向けて出発</p>
<p>7月24日</p>	<p>夕刻：厚木飛行場からマニラを経て帰国の途へ</p>	<p>7:20 東京着 帰国の準備 18:00 厚木飛行場からマニラを経て帰国の途へ</p>